

尺となる。⑦のみが少しまとまらない数値となるが、S B 301西端を基準とした規格設定を考えることができるのではないだろうか。

また、S B 307を除いた建物・柱列は、いずれも「7尺」という一定の規格基準を持っている。この「7尺」という数値は、高橋康夫氏によれば室町時代における「1間」に相当するものであるという^③。当該建物の時期が14世紀後半以降であることとほぼ符号する。

b. 建物群の性格と空間構造

S B 301という規模の大きい建物を基準として、それ以外の建物・柱列が設定されているらしいことが窺われた。これら全体でひとつのものであることは、もはやあきらかであろう。規模を見れば、S B 301が「主屋」に相当する。S B 304の南柱列はS B 301の梁間幅と同じではあるが、ピットの形状が全く異なり、S B 301ほどの規模を有するものではないであろう。S B 305はいうまでもなく小さい規模のものである。したがって、S B 304・305はS B 301に付随する建物ではないかと考えられる。

また、S A 302・S B 304・S B 305・S A 306の間(③・④)は、7尺という一定の間隔をもっている空間である。積極的に評価すれば、「通路」の機

能を考えるのが妥当であろう。機能的には、東側からの進入を意識したものとも考えられ、S A 302に当たって南に折れた後、S B 301に至るという経路が想定される。そうした場合、S B 301の入口のひとつが南向きに存在していた可能性があるだろう。しかし、「雨落ち溝」と考えられるS D 303とS B 301との間隔を見ると、東側が広い。このことは東側に庇を有していた可能性を示唆するものであり、柱列S A 302との関係が問題となる。

c. 建物群の性格

当該建物群からの出土遺物は、極めて少ない。それは、包含層に相当する層が削平されていることも考えられようが、ゴミ捨て穴のような土坑についても全く認められないことも注意を要する。

このような規模と企画性および付随する要素からは、当該建物群に対して「武家屋敷」とすることも可能ではないかと考えられる。しかし、どのような要素によって「武家屋敷」が定義されるのかについては、未だ際立った言及はない。平成2年度調査区における建物群についていえば、1棟が単独で存在するものではないこととともに、複数棟が極めて隣接したあり方を示すこと、また、企画的に柱列を配していること、などを挙げることができる。

4. 多気における中世地方政治都市のあり方

以上のことから、今回の調査によって得ることができた極めて限定された資料からも、「多気」の興味深い事例の一端が明らかになったと思う。ここでは、前項までの検討を踏まえうえて、「都市・多気」についての見通しを述べておく。言うまでもなく、総合的な検討のためには更なる資料の充実を待たねばならない。

a. 北畠氏「多気」の発生と消滅

第2章において見てきたように、「多気」においての興味深い事例が増加するのは、北畠氏という強大な領主権力の入部を契機としている。北畠氏が「伊勢国司」として任ぜられたのは南北朝時代・14世紀前半であろうが、その時期の文献に北畠氏と多

気とを結び付けるようなものはない。多気に北畠氏が入部したことを示す確実な文献資料は『満濟准后日記』の応永22(1415)年5月24日条であるが、『枝葉抄』^{②①} 応永10(1403)年3月29日条^{②②}に「多気」および「ミカキノ里 伊勢国也 国司管領」とあることから、間接的に「多気」と北畠氏とを結び付けることができる。

北畠氏「多気」が消滅するのは、直接的には織田信長の伊勢攻略によってであるが、本拠地としての多気の機能停止は、織田信長の伊勢攻略に伴って多気が焼亡する時期(永禄12(1569)年)^{②③}であろう。したがって多気は、おおよそ170年間にわたって、北畠氏が本拠地としたところであったと考えられる。

b. 多気の「都市整備」

文献によって測り知れる北畠氏「多気」は、15世紀初頭からであった。さて、北畠氏が拠点をこの地に設定する意義を考えてみよう。多気は、後の伊勢本街道として機能を果たす道の途中にあり、ある程度の交通の便を考慮しての配置であったことは想像に難くない。しかし、それにしても多気は山間部で周囲を峻険な山岳によって囲まれており、交通の便が良好とはいえない。多気と北畠氏が直接関連する初現の文献史料は、北畠満雅が幕府に対して蜂起する時期であり、そのような軍事的要因を多大に内包した拠点設定であったものと考えられることができる。なお、北畠氏は国司でもあり、実質的な守護大名でもある。したがって、多気が政治的中心としての要素を内包していることは言うまでもない。

このように、地域の統括者＝大名権力としての北畠氏は、多気を軍事性・政治性を備えた拠点として機能させようとしているといえる。これはすなわち、この地に一般集落とは異なった属性を具備した場を形成する必要があることを示す。特に、この地が当初軍事的要因を多大に内包して成立したものであるとするならば、大規模な政治的・軍事的性格＝一次的な非生産的場を維持するだけの設備と環境が必要となる。すなわち、生産地でない消費地としての場＝都市を建設する必要があるのである。その意味で多気は、北畠氏「多気」として発生した当初から都市性を具備している必要があるのである。

北畠氏「多気」の都市的要素は、現象面からは寺院という非生産階級の建造物の多さと土地区画において認めることができる。第Ⅱ章で触れたように、六田地区には明確な土地区画が遺存している。また、大蓮寺調査区における工房跡の建物方向が、現在の田圃の区画方向に揃っていることは、この地に一定の区画が存在していることを物語っている。ただし、土井沖地区における土地区画は地形にかなり制限されているようで、先述のS B301を中心とした「武家屋敷」と工房跡の建物とは方向が揃わない。しかし、今回の発掘調査によって得られた大きな成果のひとつに、大蓮寺調査区における現況地割りと建物方向との一致がある。これは15世紀前半代の工房跡

から認められるものである。すなわち、15世紀前半代には当地の地割りが開始されていることを示唆するものであり、北畠氏・多気の成立が、明らかにこの時期まで遡ることと理解される。

多気における土地区画を、遺存している地割りから想定したのがfig. 3である。この図と近世絵図を比較すると、先述の寺院と同様、ある程度の一致を認めることができる。道の区画を最も重視しているのは六田地区であり、この部分に政治的中心が置かれていた可能性が高いであろう。

c. 北畠氏「多気」の史的位置づけ

北畠氏「多気」の位置づけのためには、武家屋敷群と「町屋」群の存在の有無の確認が必要である。果たして、それぞれが別の地点に何らかの閉塞性を有しながら存在しているものなのかどうかは、歴史的に位置づけるための大きな問題である。越前朝倉氏の一乗谷は、小野正敏氏によって詳細な検討がなされているが、そこでは、武家屋敷といわれる「町屋」とがある程度渾然一体となって存在している状況が復元されている。この「町屋」が「店舗」のような機能を果たしていたものかどうかは今なお即断すべきものではないが、小島道裕氏や石井進氏の指摘のように、直属工人と見なすのが妥当であろう。すなわち、近世の「城下町」における商人町とは異なるものと考えべきであろう。

さて、一乗谷をはじめ、戦国大名といわれる存在を契機として成立した都市は、近年「戦国期城下町」とされている。しかし、一乗谷のような属性を具備している政治都市を「城下町」としてしまうと、その発生は戦国時代はおろか室町時代をも飛び越えて、鎌倉幕府による都市・鎌倉にまで遡ってしまわざるを得ない。すなわち、一乗谷のような都市は、近世における城下町とは同一に扱うべきものではないと考えるのである。

都市としての近世城下町とそれ以前のものとを区分する要素はいくつかあるが、とりあえず多気の状態からいえば、都市としての閉塞性を挙げることができよう。先述の一乗谷にしても後北条氏の小田原にしても、山岳と土塁という違いこそあれ、都市域を限定するところにその性格の一端を窺うことがで

きる。しかし、織田氏の安土、豊臣氏の大坂は、一見その都市域を区画しているように見えるものの、強固な区画は本城のみあるいはそれに付随する上級家臣屋敷群のみであり、一般住居地の区画は実質的には存在せず、「町」空間が可能な限り拡大していくことができる。この観点からすれば、北畠氏多気は一乗谷などの一群に含まれるものである。

したがって、北畠氏多気は、室町時代に発生する軍事的要因を多分に含んだ、城下町の系列ではない地方政治都市であるとする事ができよう。多気の中世地方政治都市研究の資料としての価値は、当地が遅くとも15世紀前葉あたりから展開していくことから、また、遺構の状況が極めて良好と推察されることから、極めて高いものと言っても過言ではない。

(註)

- ① この土器の特徴については、伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『三重県埋蔵文化財センター紀要』第1号 1992)および同「大里地区内遺跡群」(『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県埋蔵文化財センター 1992)参照
- ② 服部久士「家野遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県埋蔵文化財センター 1990)
- ③ 田中喜久雄「上野垣内遺跡」(『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980)
- ④ 伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『三重県埋蔵文化財センター紀要』第1号 1992)
- ⑤ 地元奥野友一氏のご教示による。
- ⑥ 小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態～伊勢国ホル郷を素材として～」(『三重県埋蔵文化財センター紀要』第1号 1992)
- ⑦ 伊藤裕偉「近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告」第3分冊 楠ノ木遺跡 三重県埋蔵文化財センター 1991)
- ⑧ 竹内英昭「伊勢寺遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊 三重県埋蔵文化財センター 1991)
- ⑨ 増田安生「ミゾコ遺跡」(三重県教育委員会 1985)
- ⑩ 田村陽一「釈尊寺遺跡」(『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊1 三重県教育委員会 1989)
- ⑪ 註(1) 文献
- ⑫ 小林秀「御所裏遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県埋蔵文化財センター 1991)

- ⑬ 平成3年度北畠神社調査。なお、宮崎洋史・伊藤裕偉「北畠氏館跡第2次発掘調査略報」(1992)に出土土器を少量掲載している。
- ⑭ 大西素行「斎宮跡・露越遺跡」(『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980)
- ⑮ 森川櫻男ほか「安田中世墓発掘調査報告」青山町教育委員会 1988)
- ⑯ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」(『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 1986)
- ⑰ 橋本久和「80年代の瓦器碗研究をめぐって」(『博物館学芸員課程年報』第5号 追手門学院大学 1991)・森島康雄「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」(『大和の中世土器』Ⅱ 1992)など
- ⑱ 小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」(『伊賀留我』10 1989)
- ⑲ 藤堂元甫『三国地誌』宝暦13(1763)など
- ⑳ 高橋康夫「中・近世都市の空間と構造―京都を事例として―」(『関西近世考古学研究』Ⅲ 1992)
- ㉑ 『続群書類従』補遺1 続群書類従完成会 1927
- ㉒ 奈良県教育委員会編『奈良県「歴史の道」調査報告書-伊勢本街道-』(1985)
- ㉓ 『信長公記』(『新訂増補史籍集覧』臨川書店1967)、「公卿補任」(『新訂増補国史大系』第55巻公卿補任第3篇 1965)ほか
- ㉔ 都市成立の契機については、若林幹夫『熱い都市 冷たい都市』(弘文堂 1992)による。
- ㉕ 小野正敏「越前一乗谷の町割と若干の問題」(『日本海地域史研究』第3輯 1982)
- ㉖ 小島道裕「戦国期城下町の構造」(『日本史研究』257 1984)および石井進「鎌倉の町屋から戦国の町屋へ」(『中世都市と商人職人』名著出版 1992)